「日本と／かブラジル」という限界を越えて

－ ある日本人の移動に関する生活史 －

立　川　陽　仁

要旨：本稿は、ブラジル移住経験のある日本人男性、S氏の生活史をおもに移動ルートの再構成を通じて素描するものである。

この作業により、筆者をふくむ移民の研究者たちがもはやその研究対象をどこか特定の空間――移住先なり出身国なり――に押し込めておく、「近代」特有のやり方がますます困難になってきていることが理解されるであろう。それをふまえ、本稿ではつぎに〈住むこと〉から〈移動すること〉へとわれわれ研究者の視点をシフトしていく可能性を検討する。

1　はじめに

本稿の目的は、大きく2つあげられる。第1に、ある日本人男性S氏へのインタビューをもとに、彼の生活史、とくに移動に関する歴史を素描することである。

S氏は1968年に最後の〈あるぜんちな〉丸に乗ってブラジルにわたった人物であり、日伯間の移民に関する研究に着手しなければならない筆者にとっては、この事実こそがS氏に接近する直接の原因となった。つまり筆者には、〈ブラジル〉にいた〈日本〉人というふうに、「ブラジルという土地」と「日本の出自」という属性の両方を備えた人物のみが「調査に対して適切」という規定が働いていたのであり、S氏はまさにその規定に合致した人物であったということになる。しかし、後に何度もふれることになるであろうが、彼の人生は、当初の筆者が望んだような企て、つまり、ある調査対象を「ブラジル」とか「日本」という特定の土地に配置しようとする企てを拒否するものであった。詳しくは後述するが、やがてS氏はブラジルを離れ、日本、アメリカを経て、最終的な活躍の場を（S氏の現住所がある）カナダのブリティッシュ・コロンビア州に移すのである。

S氏のこうした経歴から、本稿の第2の目的がおのずと浮かびあがる。これまでの日伯間の移民研究の特徴を簡潔にいうならば、その多くはブラジルに住みつづけている日本（日系）人、つまりブラジルを「ホーム」とする日本出自の人びとを対象にしてきた。1990年の日本のいわゆる「入管法」（出入国管理及び難民認定法）改定以後は、調査対象が次第に「ブラジルに住む日本人」から「日本に出稼ぎにきた日系人」にシフトしてきたが、それでも調査対象を「日本とブラジル」ないし「日本かブラジル」というふうに、特定の空間をホームとする人物たちに閉じ込めてしまおうとする企て自体は変わっていない。これらの研究においては、「ブラジルにわたった日本人にとっての日本」あるいは「日本に帰ってきた人にとってのブラジル（ないし日本）」に関するエスニシティおよび忠誠心が扱われてきたといえる。しかしこれら先行研究の手法では、筆者がであったS氏をはじめ、戦後の移民の多くについて理解を深めるには限界がある。その限界は、たとえば彼らのきわめてフレキシブルな移動をふりかえるだけでも明白であろう。「日本とブラジル」であれ、「日本かブラジル」であれ、2つの空間に調査

者がみずからの対象の居住を閉じ込めると、S氏のような人物を正確に理解できるはずがない。そこでこれらのフレキシブルな戦後移民の現状をより正確にとらえるために、いかなる方法論が適切なのかについて検討する必要もある。これが本稿の第2の目的である[1]。

2　調査について

本来、筆者の専門とするところはカナダの北西海岸（太平洋沿岸）の先住民を人類学的に研究することである。つまり筆者は、移民研究全般はもちろん、ブラジル移民に関する研究については門外漢に等しい。そのような筆者が日伯間の移民に関する研究に携わるようになったきっかけは、2008年に同僚の社会学者と人類学者で立ちあげた「日系ブラジル・ペルー人のソシオセントリック・ネットワークの機能の社会学的調査」という研究プロジェクトに研究経費が配分されることになったことである（注1参照）。

この、一見「どうでもいい」情報は、じつはつぎの点で重要である。つまり、筆者は最初から〈日本とブラジル〉あるいは〈日本とペルー〉という2つの空間に関係するものに、みずからの調査を限定されていたということである。この事実に対して当初何ら疑問ももたなかった筆者は、みずからの調査地であるカナダのキャンベル・リバー（Campbell River）という町の日本食レストランで板前として働き、カナダに来る前はブラジルに住んでいたというS氏のことを思いだした。彼であれば、このテーマの調査対象に「妥当」と考えたのである。

2010年1月、別の調査でカナダにいこうとしていた筆者は、「里帰り」していたS氏とたまたま同じ飛行機に乗りあわせた。その場で筆者は彼に、ブラジルでの話を聞かせてほしいと頼み、いずれ時間をとってインタビューをするという約束までとりつけることができた。その後の2010年9月にS氏に直接インタビューをとるまで、筆者はS氏と何度かコミュニケーションをとっている。その手段はおもに電子メールと電話であるが、この段階ですでにS氏はブラジルにいくきっかけ、彼がこれまでに移動したおおよそのルートなどについての情報を提供してくれていた。これら数回のやりとりでさえ、筆者にはきわめて貴重な情報収集であったが、2010年4月以後、S氏が多忙になったことにより、電話や電子メールでのやりとりは減少していった。それから直接あってインタビューする9月まで、筆者は関連する文献を読み、またS氏が「自分の人生を知るためにはぜひとも読んでおいてほしい」と勧めてくれた資料類を閲覧することに費やした。

2010年9月にカナダを訪れた筆者は、計3回S氏にあって会談した。この3回のうち2回はいわゆるインタビューの形をとっており、われわれは1回目のインタビューに6時間、2回目のインタビューには2時間を費やした。紙幅の関係上、本稿ではそのインタビューのデータをすべて載せるのではなく、彼の半生の概略を載せるにとどまるであろう。しかし彼の半生に関する概略でさえ、戦後移民の活動や思惑を知るためにはおおいに役立つと思われるし、またその知見はこれまでの日伯間の移民研究史になにかしらの反省をもたらすかもしれない。

3　S氏の移動史

3－1　日本での生活（1948－1968）

S氏は1948年に6人兄弟の末っ子として、新潟で生まれた（2010年現在62歳）。その後家

族は東京に移り、S 氏の父は印刷工場で働いた。6 人兄弟とはいってもかなり年齢に開きがあったので、S 氏が中学生になる頃には S 氏以外の兄弟はみな家をでており、両親と S 氏しか家には住んでいなかった。しかも S 氏の母親が糖尿病を患ってからは、S 氏は父親と 2 人で生活を営むことも多くなっていた。

S 氏の回想のなかに、兄弟はあまり登場しない。日本にいた 20 歳頃までの S 氏のはなしに登場するのは、むしろ新潟の従兄である。従兄とはいっても S 氏より 25 歳年上である彼は、S 氏が 6 歳くらいのころにブラジル北部のアマゾン河口に位置するトメアスー（Tome-Acu）に移住したのであるが、横浜から出発するまでの約 3 週間の準備期間を東京の S 氏宅ですごしており、その後もたびたび手紙で S 氏にブラジルでの状況を事細かに伝えてきた。「小学生の頃自分は自転車が欲しくてたまらない事があった、6 人兄弟の末っ子として育った家庭はそれほど裕福でもなく当然買ってもらえるはずが無い。そんな時ブラジルの従兄が自転車を送ってくれた夢を何度か見た」と語るように、幼少期の S 氏には、従兄の語るブラジルが憧れの土地として認識されていた。

S 氏は「なぜブラジルにいったのか」と聞かれると、必ず「悪い従兄にだまされて」と冗談まじりで答える。しかし本音のところでは、S 氏は、彼をブラジルにいくよう仕向けたのは母親だと考えている。就職を考えなくてはならなくなった高校 3 年生時に、S 氏はブラジルにわたった従兄から頻繁に手紙を受け取るようになった。彼はこのことについて、おそらく母親がその従兄に頼みこみ、ブラジルに S 氏か関心をもつような手紙を書かせたのではないかと推測したのである。この真意はわからず終いであるが、少なくとも母親が一番 S 氏のブラジル渡航に乗り気だったのはたしかなことらしい。

S 氏が高校生のころ、たしかにブラジルのトメアスーはピメンタ（黒胡椒）作付の成功で、日系人社会を中心におおいに好景気を満喫していた。S 氏の従兄は機械技師で、ピメンタ農家ではなかったものの、ピメンタ景気の恩恵を授かっていたことは容易に想像できる。いずれにせよ、こうした当時のブラジル（トメアスー）の好景気と家族からの後押しがあり、S 氏は日本で就職せず、ブラジルにいく決心をしたのである。

ブラジルに移住するための申請をおこなった S 氏は、許可が下りるまで魚群探知機の会社でアルバイトをする。そこで正社員にならないかという誘いも何度もあったが、彼は「ブラジルにいくから」という理由で断りつづけた。誘いを断りつづけることによって、やがて彼はこの会社に居づらくなる。そこでこの会社を辞め、その後しばらく、ブラジル渡航の許可がおりるまで、新橋の別の会社でアルバイトをやることになった。

当時のブラジル移住政策は、サンパウロなど南部ではなく北部のアマゾン開拓に力を入れるようになっていた（今野・藤崎（編）　1983：189-191）。つまり農業従事者を厳選する傾向がみられたわけである。しかし他方で、技術者の募集も増加しており、S 氏の場合は後者の資格で応募していた。もちろん農業従事者のほうが移民としての認可を得やすかったであろうが、S 氏にとって都合のいいことに、彼は従兄からの呼び寄せという形をとることができた。このように、S 氏にとってはブラジル渡航の許可を得ることにそれほど大きな問題はなかったが、それでも彼は、海外移住事業団の指示により、S 氏は近くの横浜ではなく神戸から出発することになったので、神戸の移住センターに入所すべく住民票を神戸に移さなければならなかったし、さらには一時期農業に関する指導も受けさせられたのである。こうした準備期間を経た後の 1968 年、20 歳の S 氏は最後の〈あるぜんちな丸〉にて出航したのである。

S氏が6人兄弟の家族で育ち、また両親がともに病気がちであったことだけを考えるならば[2]、彼のブラジル移住の直接的なきっかけは、初期の戦前の移民と同じく、経済的理由によるように思える。しかし当時の日本は高度経済成長期にあたっているし、実際彼もアルバイトで入社した会社から正社員になる誘いをうけつづけていたわけであるから、じつは経済的なプッシュ（押し出し）要因はそれほど大きくなかったはずである。S氏がブラジル移住を決心したより直接的な要因として、われわれは本人のいう「（当時）若かったので先のことはあまり考えていなかった（し、）一度口にだしたことは必ずやるタイプの人間なので、後で引っ込みがつかなくなった」という理由をまじめに受け入れていいように思われる。

おりしも当時、日本ではマスメディアを通じてブラジルをはじめとする海外への移住をさまざまなスローガンで打ちたてていた。海外移住事業団による『海外移住事業団十年史』（1973）をみると、その典型例がすぐにみつけられる。まず目につくのは、海外移住新聞という手書きで作成された当時の新聞の写真群である。これらの新聞では、挿絵（漫画）つきで「ジャンプしたいものみんなあつまれ」など、日本から飛びだして海外で夢を実現することをよしとする台詞が多くみられる。同書に掲載された昭和47年10月17日の朝日新聞をみると、そこには「日本には夢がないよ」という見だしで若者の海外移住の増加を報じた記事もみられる（海外移住事業団 1973：204）。さらには昭和45年の静岡新聞では、同県の高校教師研修会に関する記事で、「海外へ雄飛　スケールの大きい教育を」と銘打ち、その準備状況を伝えている（海外移住事業団 1973：201）。このように、当時日本政府（より正確には海外移住事業団となろう）やマスメディアは盛んに海外移住のきっかけとして「大きなことを成すなら海外で」という言説を流しつづけてきた。S氏と同じく最後の〈あるぜんちな丸〉に同乗したI氏は、NHK取材班が作成したドキュメンタリー番組[3]のなかで、ブラジルに移住した理由として「日本にいたらでっかいことはできないし……」と答えている。ここでI氏が本当にそう思ってテレビの取材班にそう答えたかどうかは、それほど問題ではない。少なくともわれわれは、マスメディアが上記の「大きなことを成すなら海外で」という言説を補強し、S氏だけでなくI氏がその言説をみずからのうちに体現していることを明らかにすれば十分であろう。ただ、〈あるぜんちな丸〉に乗っていたまさにこのとき、S氏だけでなくI氏も「若い故に」深く考えていなかったことは、NHKが追跡調査をして放送した30年後の番組のなかで明らかになる。1998年当時、歯科医院を開業しようとする息子のために千葉県に出稼ぎに来ていたI氏は、30年前の自分の映像を見て「若くて何も考えていなかった」というふうに、S氏と同じ言説を繰り返しているのである。「先のことはあまり考え」ない多くの若者は、「大きな夢を叶えるために海外へ」という、いわば移住イデオロギーと呼べるものにのっとって、海外に出発したとみるほうが妥当であろう。

さて、〈あるぜんちな丸〉は神戸から横浜を経由して、その後ハワイ、ロスアンジェルス、パナマ、ベネズエラのカラカスに停泊し、2ヶ月後にブラジル北部のアマゾン河口にある都市ベレン（Belém）にたどりついた。この2カ月の船旅が（船酔いをのぞいて）心身ともに快適なものであり、かつ多くの旅行者にとっては忘れがたい、貴重な経験であったことは、S氏をはじめ、多くの旅行者の回想から明らかになる。筆者の意図に反し、S氏はブラジルにいく前の日本での生活に関するはなしからブラジルでの生活のはなしにすぐさま移行しようとはせず、この船旅のなかの、食堂の豪華さ、日々繰り広げられるパーティと交友関係、経由先のハワイでのドライブなどについて雄弁に語ろうとした。S氏にとって、この2カ月の船旅がブラジル

に滞在した約20年と同じ程度に重要であったというのはいいすぎであろうが、それでもきわめて重要な部分であったことに変わりはない。事実、S氏は当時同じ船にのった「仲間」たちとの交流を、カナダに移ったいまでも維持している。

3－2　ブラジルでの生活（1968－1988）

2カ月間におよぶ〈あるぜんちな丸〉での船旅を終えたS氏は、アマゾン河口の都市ベレンに到着した。当時のベレンはインフラの不整備が著しく、ほとんどの家にはテレビやラジオもなかった。また、手にする紙幣のほとんどがボロボロの状態であった。電力の供給も昼間だけに限られ、いくつかの家では自家発電機で夜の電力を補った。S氏は最初の半年を例の従兄の家ですごし、彼の仕事を手伝ったが、やがて従兄とそりがあわなくなり、従兄の家をでて独自に仕事を探すことになった。かつて、ブラジルにわたった日本人といえばサンパウロであれ北部であれ、農業をおこなうのが通例であった。ブラジル北部では、当時ピメンタ栽培が全盛期を迎えており、「黒いダイヤ」と呼ばれるほど経済的利益をあげていた（新藤ほか 2009：282-283）。しかしS氏は自分もピメンタ栽培をやろうという気にはなれなかったようで、最終的には三菱商事のベレン支社に就職した。なお、S氏は三菱商事で働いた期間、21歳にてベレンで看護師をしていた日本人女性と知りあい、結婚して3人の子供をもうけることになるが、後にカナダに移住した際に離婚した。

三菱商事での彼のおもな仕事は、ベレン近郊にあるトメアスーの日本人植民地からピメンタを買い付けることであった。そこで彼はベレンからトメアスーに転勤になり、そこに2年間住むことになる。トメアスーの日本人植民地の住人には、若い世代を中心に、S氏と個人的に仲良くしていた人も数人いたようであるが、基本的に彼はトメアスー植民地の日本人たちと距離をおいた。S氏いわく、トメアスーの住人のほとんどは日本の「田舎」出身で、東京出身のS氏とは根本的にそりがあわないことも多く、また「サラリーマン」でそれなりの収入があったS氏に対するトメアスー住人からの妬みも少なくなかった。さらに、同植民地のピメンタはすべてこの組合を通じて価格を決められて売られるという規定を破り、個人的にS氏に近寄ってピメンタを組合価格より高く買い取ってもらおうとする人物もおり、このことがS氏と植民地との関係に緊張をもたらしたようである。これらのことはすべて、S氏がトメアスーの日本人と距離をおいた要因となったのである。

彼がトメアスー植民地の日本人と距離をおいた理由はもう1つ考えられる。トメアスーに限らずブラジル全域において、1970年頃の日本人コミュニティでは、戦前にブラジルにわたった戦前移民、その子供たち（2世や3世）に、戦後渡伯した「新移民」が加わった状態であった。こうしたさまざまなタイプの「世代」が同じコミュニティを構成するなかで、そこには明確な序列 —— 戦前移民の1世、2世……「新移民」という順での序列 —— ができつつあった（三田 2009：82-88, 122-130）。同じことはトメアスーにもいえる。こうした状況において、1968年にブラジルにわたった当時20歳のS氏が植民地の序列に組み込まれるのを嫌がるとしてもなんら不思議はない。S氏にとっては、みずからを植民地のビジネス・パートナーとして位置づけておいたほうが、当然居心地がよかったはずである。

S氏は三菱商事での仕事を大変責任が重く、かつストレスのたまるものだと回想している。そして24歳の頃（1972年頃）、4年間勤めた三菱商事を退社し、ベレンにてパン屋を開業した。彼にとってはベレンでパン屋をやっていたこれからの14年間こそが、ブラジルにおける経済

的な黄金期となる。

パン屋では、前日までに注文のあったところに毎朝パンを届け、午後にはまた注文をとりにいくというのがルーティンで、多くの注文を受けていたＳ氏のパン屋は経済的に安定していたどころか、かなりの利益をだしていた。彼のパン屋の隣に別のブラジル人経営のパン屋が開業したときでさえ、Ｓ氏のパン屋にはなんら影響を及ぼさなかった。その（隣人の）パン屋は半年で潰れ、そのテナントをＳ氏が買いとってパン屋を拡張したほどである。パン屋の経営に飽き足らなかったＳ氏は、その後ブティックやスナックの経営にも乗りだし、また450メートル×4.5キロメートルの農地を購入して牧場経営にも乗りだした。パン屋のそばに2ベッドルームの部屋をもっていた彼は、そのほかにも新しくできた高層マンションに3ベッドルームの部屋を買ったり、ベレンの高級住宅地に家を購入したりもした。

しかし1980年代になると、ブラジルには大きな経済危機が2回訪れる。1980年、石油価格の高騰により、ブラジルの財政赤字は100億ドルを超え、年率100パーセントを上回るインフレが訪れた。しかしそれだけでは終わらず、1980年代後半になると品不足や闇取引が横行し、1988年にはインフレ率が900パーセントを超えた（cf. 三田 2009：151-152）。この経済危機は、当時パン屋のほかにブティックとスナックを経営していたＳ氏にもふりかかる。彼も資金繰りが困難になっていき、パン屋をのぞくすべての事業をここで打ち切らざるを得なくなった。それだけではブラジルから離れるきっかけにはなり得なかったかもしれないが、当時、経済危機で貧困に陥った人びとによる犯罪が激増したことにより、彼はとうとうブラジルをでていく決心をする。1980年代後半、Ｓ氏とその家族は、わずかに航空機に預ける2つの荷物と2つの手荷物をもって、約20年住んだブラジルを離れて移動を開始するのである。

3－3　日本とアメリカでの生活（1989）

ブラジルを離れたＳ氏の家族は、とりあえず日本に帰国した。1980年代後半、数多くのブラジル日系人が日本への出稼ぎを開始するが、Ｓ氏も彼らと同じ感覚で日本に帰ってきたのであり、もちろんそれら多くの日系人と同様、日本を移住地とする選択肢ももっていた。しかし彼は、結局日本で暮らすことをあっさりと断念するのである。Ｓ氏によれば、日本に帰った彼は、まずもって（日本在住の）日本人による欧米志向、とりわけアメリカ志向を感じとったという。つまりブラジルに住んでいたということ、ポルトガル語ができるということは、日本で暮らすにあたって何ら利点をもたないと感じとった。そのことの影響は、Ｓ氏本人よりもむしろ2世となる子供たちに大きく、もはや日本語がほとんどできない彼の子供たちが日本に適応するのはむずかしいと悟ったＳ氏は日本移住を断念したのである。

日本に帰るという選択肢を捨てたＳ氏がつぎに目を向けたのが、北米であった。彼が北米に目を向けたのは、上記の日本における欧米志向も関係あるかもしれないが、それ以上に彼の人的ネットワークのほうが大きなきっかけを与えた。ブラジルにおいて、彼にはカナダ出身の人びとと交友関係があり、カナダでの生活について情報を得る機会があった。そこで彼は、それらカナダ人たちからの情報収集をさらにおこない、その上でカナダへの移住を決断し、移民局に申請をおこなった。しかし移民局からなかなか返事が来ないなかで、彼は別の交友ネットワークを利用し、アメリカ在住の友人の誘いでアメリカにいくことになるのである。しかしＳ氏はすぐには渡米せず、東京のすし屋で約1カ月、板前としての修業をする。その経験をいかし、北米ではすし職人になろうと考えていたことは想像に難くない。

すし屋での修業後、S氏は友人の誘いのままアメリカのロスアンジェルスに向かった。しかしいざアメリカにいってみると、たとえ労働ビザをもっていても必ずしも働けるわけではないことを知る。それでもなんとかロスアンジェルスで仕事を開始したS氏であったが、彼にはあわない職場の環境のため、1カ月でその店をやめ、デトロイトに移る。デトロイトでは日本食レストランNで3カ月ほど働いた。しかしその頃、ようやくカナダの移民局から許可が下りたので、彼はデトロイトを離れ、カナダに移住したのである。

最終的にS氏がアメリカではなくカナダを選択したのは、ビザや永住権がアメリカより多少はとりやすいという理由による。それでも彼は、当時のカナダにおけるすし職人の需要の高さ、そして小さい子供がいることなどが配慮されなければ、カナダで会っても許可が得られなかったであろうと移民局にいわれたそうである。S氏が41歳から42歳の頃であった。

3－4　カナダでの生活（1989－）

ブラジルでは「サラリーマン」を経験し、その後はパン屋を営んだS氏であるが、カナダではほぼ一貫してすし職人として働きつづけている。ただ、本項で示すように、彼は（おもにカナダの西側を）さまざまな理由から移動しつづけてきた。筆者がこの論考をしたためている2010年だけでも、S氏は2度の引っ越しをしている。

カナダにわたった直後のS氏は、いきなり3つの「問題」に直面した。第1に、労働ビザから移民ビザ（永住権獲得）に切り替えるために必要な金額を貯めること、第2に相つぐ両親の死、第3に英語である。

カナダに移住後、S氏はまずバンクーバー近郊のサーレー（Surrey）の日本食レストランSで職を得た。店のおかみさんから悪質ないじめを経験したと感じたS氏であるが、「移民ビザを得るまではここで働こう」と考え、レストランSで働きつづけた。当時の彼の月収は約1,500ドルと考えられる。この額自体が多いかどうかはさておき、とにかく彼は、移民ビザの申請に必要な、一定金額以上の残高を証明する残高証明書の提出まで、働きつづけて貯金を積み重ねなければならなかった。結局彼は、いくらかの幸運も手伝って無事に残高証明書を提出し、1980年代当時はほぼ不可能といわれた労働ビザから永住権への切り替えに成功した。

カナダに移ってすぐ、姉が訪問してきた。そのときに彼は、まず父親が、ついでその半年後に母親が亡くなったことを知らされた。ただ、ブラジルに旅立った際、彼は親の死に目にはあえないだろうことを覚悟していたらしく、これもまたみずからの運命なのだと考えることにしたという。

日本とブラジルのそれぞれで20年を費やしたS氏にとって、英語圏での生活ははじめてであり、当然英会話はほぼできない状態であった。もちろん彼には語学学校に通うという選択肢があったものの、彼はそうしなかった。レストランSで働いていた頃、彼の休みは日曜と月曜であり、そのうち月曜を彼はゴルフ場ですごしていた。彼はできるだけアジア人とラウンドをまわらず、イギリス系カナダ人とラウンドをまわるよう心がけた。彼にとってはゴルフ場での会話が英会話能力を磨く1つの場であった。

さて、サーレーのレストランSを「永住権獲得までの仮の就職口」と考えていたS氏であるが、彼は結局この店で7年間働きつづけた。彼が結局この店を辞めたのは、経営者が店を韓国人に売り払ったことがきっかけである。この韓国人新オーナーは経費削減のために人件費や材料費を削り、そのことがS氏におおいに不満を抱かせた。そこで彼は、レストランSを辞

め、つぎにバンクーバー近郊のコキットラム（Coquitlam）にある日本人経営のスーパーで、テイクアウトのすしをつくりはじめた。

コキットラムで2年半働いていた頃、店主が急死した。その店主は亡くなる直前、S氏に「店を頼む」といい残したらしい。しかし遺族とのいざこざにまきこまれるのを嫌がったS氏は、そのスーパーを辞め、バンクーバーのダウンタウンにある老舗レストランKで板前をはじめた。いわゆる「花板」にまで昇りつめたS氏ではあるが、オーナーとのいざこざのため、2年もしないうちに店を辞めている。

その後S氏は、バンクーバー近郊のリッチモンド（Richmond）の日本食レストランに移ったものの、そのレストランには1日か2日いたくらいで、その頃誘いがあったバンクーバー島中部の町コートニー（Courtenay）にある日本食レストランYにすぐに移る。S氏いわく、彼はY店のオーナーと単に馬があっただけでなく、両者がデトロイトのレストランNで働いた経験を共有していたことが、両者の好調な関係を後押ししたようである。こうしてバンクーバー近郊の移動を繰り返していたS氏は、このときはじめてバンクーバー島へと移ることになる。52歳のことである。

S氏はY店で働いた5年後、この店も日本人ではない経営者の手に移ることになった。それと同時に、彼は、休暇の際しばしばY店に訪れていたキャンベル・リバー（Campbell River）という町の夫婦が経営する日本食レストランT店に移ることになった。筆者がS氏と知りあったのは、彼がこのT店で働いていた頃のことである。

T店で5年間働いたS氏は、2010年、62歳にして独立してみずからの店をだすことを計画する。そこで彼は、アルバータ州に住む友人からの誘いに乗じ、車にすべての荷物を積んでカルガリーに移動し、そこでテイクアウトの店をだす準備をおこなった。しかしその2カ月後、なんらかの理由でキャンベル・リバーに戻ってきた。現在はキャンベル・リバーでテイクアウトの店をだすために、準備を進めているところである。

4　S氏の「居住」と「移動」

前節ではS氏の生活史の概略を、おもに彼の移動と労働に焦点をあてつつ素描した。こうした簡単な概略であっても、いざ彼の人生を過去のブラジル日系移民研究史に位置付けると、いくらかの知見が得られるのではないであろうか。本節ではまず、過去のブラジル日系移民研究史のなかにS氏の移動史を位置付ける試みからはじめる。この作業によって、S氏の半生がもはや過去の研究史のなかに位置づけられないことがわかるであろう。このことをふまえ、つぎに、彼の移動史をより的確に理解する試みとして、クリフォードの移動という概念を検証することにしたい。

4−1　ブラジル移民研究史とS氏の移動史

改めて言い訳がましいことをいわせてもらうと、筆者は本来カナダ北西海岸の先住民を専門的に研究する人類学者であり、ブラジルの日系移民に関する研究については門外漢に等しい。したがって、本項にて言及されるブラジルの日系移民研究史は、そのすべてを網羅したものではなく、ごく一部のものしか考慮されていない可能性もある。そのことを認めた上で、筆者はあえて過去のブラジルの日系移民、および彼らに関する研究史の特徴として、以下の3点をあ

げておきたい。

第1に、戦前にブラジルにわたった移民についての研究であれ、あるいは1990年以後の日本に出稼ぎで戻ってきた移民についての研究であれ、研究のテーマは圧倒的に彼らのエスニシティ、より具体的には、エスニック・アイデンティティに関するものが多い（e.g. HIRABAYASHI et al.（eds.）2002；LESSER（ed.）2003；前山 1996；中川ほか（編）2010）。ブラジルで日本の敗戦を素直に受け入れられなかったいわゆる「勝ち組」の人びとの心理、もはや帰国が絶望的になった彼らにとっての日本の位置づけ、さらには、ブラジルでは盆踊りを踊り、日本ではサンバを踊ろうとする出稼ぎ日系人たちの揺らぎなどは、もはや研究テーマの定番とみなしても問題ないであろう。筆者はこうしたエスニック・アイデンティティに関する研究に重要性があることを認めてはいるが、日伯間の移民を対象としたエスニシティ研究が、1980年代から1990年代にかけて社会学、人類学においてすでに提示されたエスニシティ研究の結論を再認しているだけだという印象ももっている。ただ、本稿ではこの件については深く論じることはしない。

第2に、時代により、研究の対象に大きな偏りがあるということである。戦前の最初のブラジルへの日系移民の時代から1990年の入管法改正まで、研究される対象はおもにブラジルに住んでいる日系1世あるいは2世以降の人びとであった。しかもそのほとんどは、サンパウロを中心とするブラジル南部への移住者であり、トメアスーなど北部への移民についてはごく一部の例外[4]をのぞいて研究の対象から除外されてきた。さらに、S氏のようないわゆる戦後の「新移民」も、ほとんど研究されることがなかったようである。今野と藤崎による『移民史（南米編）』（1983）を例にとると、約200ページにおよぶブラジルに関する記述のなかで、戦後の新移民に関してはわずか2ページしか割かれていない。それに対し、1990年の入管法改正後は、ブラジルから日本に出稼ぎで戻ってきた日系移民に焦点をあてた研究が激増している。ブラジル移民100年の歴史を総括した三田の著作『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ』（2009）では、ブラジル移民の100年の歴史においてはまだ20年の歴史しかない日系ブラジル人の日本へのデカセギに関する記述に、全体の半分のページが費やされている。

戦前にサンパウロにやってきた、おもに農業従事者、および入管法改正以後のデカセギ日系ブラジル人への研究対象の集中は、研究者の側が恣意的に対象を選んだ結果であるかもしれないが、同時に移民のマジョリティの動向を反映したものでもあろう。つまり、初期の研究においては日本からブラジルにわたり、サンパウロやその周辺で農業を営んだ人びとがマジョリティであり、かつそのまま研究対象になったのであり、戦後に移民した人びとは少数派として研究対象から除外されたといえるであろう[5]。それに対して1990年以後の日本に出稼ぎで戻ってきた人びとに関する研究の増加は、それもまた出稼ぎ民の数量的データを反映したのだといえるであろう。

このように、研究の対象となる人びとについてはそれぞれの時代背景に応じた変化がみられるものの、研究者が研究対象をきめる上でブラジルを〈ホーム〉とする人びと、ないし日本を〈ホーム〉とする人びとを暗黙の条件に据えているのも事実である。敷衍していうと、研究対象の設定においてはどこか特定の場所への〈居住〉という条件が前提となっているのである。これが第3の特徴である。もし〈居住〉が研究対象を設定する条件の1つだとみなすならば、先行研究が「ブラジルの日本人」としてほとんどの場合農業従事者を選んだもう1つの理由にたどりつけるかもしれない。すなわち、農業従事者にくらべてはるかに移動性の高く、いつブ

ラジルを離れるかわからない「商売人」や「サラリーマン」では、「ブラジルにわたった日本人移民」を研究しようとする側にとっては不都合なのである[6]。

以上に述べた特徴をもつ研究史に、S氏の移動史を配置してみよう。すぐに理解されるのは、彼の半生はまさに上記の「ブラジルにわたった日本人移民」という対象設定にうまく収まりきらないことである。S氏はブラジル移民全体の5パーセントを占めることさえない戦後の移民であり、しかも高度経済成長期にあたる1968年の、450人しかいない移民の1人である（海外移住事業団 1973：257）。当時、日本政府はブラジルでもアマゾン開拓に向けて集中的に移民を送り込み（今野・藤崎（編）1983：183-191）、彼もその方針どおりに北部にいくが、政府の思惑に反して農業には従事しなかった。移動可能性の比較的高い「商売人」としての彼は、1980年代に景気が後退するや、さっさと荷物をまとめてブラジルをでていく。多くの日系ブラジル人が日本を「デカセギ先」として選び、そしてさまざまな文化的差異に悩みつづけていまにいたるが、彼は「日本はだめだ」となれば、すぐにアメリカやカナダの状況を調べて移動を繰り返すのである。これらのことは、すべてこれまでの移民研究のなかでは「例外」であり、また研究対象として「相応しくないもの」して片づけられるもの特性であろう。

では、S氏は本当にただの例外なのであろうか。これを判断するだけの十分な数量的データを筆者は持ちあわせていないが、必ずしもそうではないと筆者は考えている。たしかにS氏は戦前にサンパウロにいった農業従事者とは多くの面で異なっている。戦前の移民の場合、彼らは日本国内の経済から閉めだされた「棄民」としての側面をもつとしばしばいわれるが（三田 2009：110-113；cf. 今野・藤崎（編）1983）、S氏をふくめた戦後の移民の多くは日本で高度経済成長期を体験しており、少なくとも日本から経済的に押しだされたという感覚は共有していない。彼ら戦後移民の多くは、「日本にいては食べていけない」という感覚ではなく、むしろ――日本政府のイデオロギーにのっとった部分もあろうが――「日本にいてはできない大きなことを成し遂げたい」という感覚を共有し、それがきっかけで移住の決断をした。つまり、戦前の移民が「もはや海外にいくしか選択肢がない」状況であったのに対し、戦後の移民は日本に残るという選択肢もあるなかで、あえて海外移住を選択したといっていい。さらに、戦後の移民、とくに1960年代以後の移民においては、S氏の従兄のような技術者、あるいはSのような商売人として移住することもじつは多くなっていた（三田 2009：131-132）。また、統計のなかや研究の対象として現れない人びと――たとえば「失敗者」やS氏のようにブラジルをでて日本以外の国にいった人びと――もそれなりに多いのではないか。つまり、日伯移民100年の歴史からみればS氏は少数派に入るであろうが、戦後移民という枠のなかでとらえるならば、彼はけっして例外とはいえないはずである。

ブラジルと日本をつなぐ移民の状況は、入管法が改正された1990年を境に劇的に変化し、また研究史もそれに対応するための努力をしてきた。しかしさまざまな種類の少数派――移住したものの生活が苦しく、日本に帰らざるを得なくなった「失敗者」たち、「失敗」はしていないものの自由意思でブラジルを離れた人たち、日本人コミュニティでの生活を嫌ってブラジル人のただなかで生きることを選択した人たちなど――を軽視してきたことは否めない。現代に生きる移民の多様性を理解するためには、S氏のような戦後移民をふくめ、こうした少数派の動向を例外視するべきではない。そのためにもS氏のような戦後移民の動向をも的確に把握し得る、理論の形成が求められるはずである。そこで次節では、S氏のような現代の移民をふくめた移民研究に向けて、若干の検討を加えたい。

4－2　〈居住〉から〈移動〉へ？

ここでまず、再びS氏の移住史を振り返ってみたい。そうすると、彼の（少なくとも20歳以後の）生活においては、〈居住〉と同じくらい〈移動〉の側面が重要であることが理解されるはずである。

日本を出国してからのS氏は、何度も引っ越しをしている。まず20歳のときに日本からブラジルにわたった彼は、1989年に日本に戻り、その後もカナダ、アメリカとわたり歩いて最後にカナダにいくわけであるが、実際のところ、こうした国家間の移動ルートのみを提示しても、彼の移動の本質はみえてこないであろう。ブラジルに移住した彼は、ブラジル国内だけでもベレンからトメアスー、そしてトメアスーからベレンに移動し、さらにベレン内でも何度も引っ越しをした。また、1989年に最終的にカナダに住むことになった後も同様に、ブリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州のあいだで何度も引っ越しをした。ここで、「同じブラジル（ないしカナダ）内、しかもブラジル北部（ないしカナダ太平洋側）での引っ越しだ」とみなして彼の〈移動〉の側面を軽視することは意味をなさない。なぜなら、彼にとって国境はそれほど大きな意味をもたなかったと思われるからである。彼にとって、ベレンからトメアスーまでの移動（実際は転勤であったが）、ベレンから東京への移動、ロスアンジェルスからデトロイトまでの移動は、そう違うものではない。S氏とその家族は、どこにいくにあたっても多くの荷物を携帯せず、軽快で手軽な移動を維持した。この点において、S氏の言葉は示唆的である――「自分のやりたいことをやるのにいろんなところにいって、……そのときに本当に必要なものがわかる。［自分］の部屋にあるもののなかで、本当に必要なものって、実は段ボール1個か2個くらしかないんじゃないか」。S氏が〈移動〉にある種の力点をおくことは、彼の荷物の少なさだけでなく、語りのなかからもうかがえる。筆者の思惑に反し、S氏が日本からブラジルに移動する際の〈あるぜんちな丸〉での生活に関して饒舌に語ったことは、それ自体われわれがいま以上に移動時の生活そのものに注意を向けるよう示唆するものである。

このように、S氏の移動史はわれわれに対していま以上に〈移動すること〉に力点をおくことを要求する。それと同時に、「ブラジル」とか「日本」という空間上の枠組みに縛られない視点を求めてもいるのである。

移動することへの眼差しは、じつはそう真新しいことではない。人類学においては、たとえばターナーがすでに1960年代に移動の局面を強調していたが（Turner 1969）、あくまで彼は巡礼における移動について扱ったのであり、旅そのものへの視点および旅のなかの移動という行為への眼差しは欠いていたといってよい。その後旅そのものを理解しようとするべく勃興したはずの〈観光人類学〉も、移動の過程の重要性を指摘したものは少ないように思われる。そういう意味で、広い意味での人類学ないし隣接諸分野に、旅、およびその移動の過程に注意をうながしたのは、クリフォードだといえるであろう。クリフォードはディアスポラに関する論考のなかで、〈居住〉（ホーム）よりはむしろ〈旅〉（トラベル）の概念およびそれに伴う方法論こそが、現代のディアスポラおよびコスモポリタニズムを理解する鍵になると主張している（クリフォード 2002：27-54）。本稿では詳しくふれることはしないが、筆者はクリフォードの議論に全面的には賛同していない[7]。ただ、S氏のような戦後移民の動向をみる上で、クリフォードの指摘は少なくとも2つの点で示唆的なのはたしかなことであるように思われる。

第1に、〈居住すること〉より〈旅すること〉に重きを置くクリフォードの視点は、〈旅すること〉あるいは流浪することにある種の異常性を付す、近代特有の視点を暴露する。クリフォー

ドはホテル、駅などを引きあいにだし、本来人は旅するものであるとした上で、旅するべき人をある空間に居住させようとするのが近代なのだと論じている。筆者は、彼のいう「本来人は旅するもの」という部分には完全に同調するわけではないが（注7を参照）、近代こそが人びとを居住に向かわせ、かつ旅することに異常性を付したという点には賛同する。先住民を抱える多くの国家で、本来狩猟採集民であった先住民を定住させ、農業に従事させようとした試みはまさにその典型である。しかしこうした実際の政治的局面以外であっても、たとえばわれわれのような人文・社会科学者のうちに同様の問題があてはまると思われる。思えば、過去のブラジルへの日本人移民の研究が、なぜブラジル開拓に失敗して日本に帰国した人を対象にしないのか。なぜ移動性の高い商人などではなく農業従事者ばかりを対象にしたのか。結局はわれわれ研究者のうちに、研究対象を選ぶ過程で「日本出自」というだけでなく「ブラジル在住」という条件が無条件に設定されていたからだというほかになかろう。これはまさに、「研究対象はある土地を占めている定住者でなければならない」というわれわれ研究者の暗黙裡の前提に帰する問題なのである。

その意味では、移動性が高く、移住を繰り返す一部の人びとは、まさに近代が課した圧力に抵抗しようとする人とみなせなくもない。ブラジルに移住した日本人においては、とくにS氏のような戦後移民たちはまさに近代国家の枠組みを容易に飛びだす「危険な」存在であったかもしれない。彼らは、みずからのネットワークにしたがい、ブラジルでのビジネスが不調になれば、少ない荷物でアメリカの友人の誘いにのってアメリカにいく。しかしアメリカの条件が悪ければ、ひょいとカナダに身を移す。こういった移民の移動性を分析するにあたっては、かつての研究のように「日本出自」と「ブラジル在住」という点にしばられず、むしろ「移動する民」であることに注目する新たな方法論が求められるのはいうまでもない。これがクリフォードの視点における、第2の点である。

5　終わりに

本稿では、S氏の生活史の概略をもとに、戦後の「新移民」の活動を素描し、その活動における移動の側面に焦点をあてる研究手法を提案した。もちろん移動を繰り返すS氏の半生が、戦後の移民の典型であるとはいえないかもしれない。しかしS氏に限らず、移住ないし移民にとっては本来的に、移動するという側面は重要なのではなかろうか。2つの世界大戦によって日本への帰国の夢が断たれ、ブラジルにとどまらざるを得なかった初期の移民たち――研究者の側にとってはむしろ好都合な対象である――こそが、むしろ稀な例ではないかと思われる。

注

(1) 本稿は、科学研究費補助金「日系ブラジル・ペルー人のソシオセントリック・ネットワークの機能の社会学的調査」（基盤B、代表：児玉克哉、課題番号203301012）からの資金援助を受けている。日本学術振興会には感謝の意を表したい。また、筆者の要請に快く応じてくれた、本研究のインフォーマントであるS氏にも感謝の意を表したい。

(2) S氏の母親が糖尿病であったことは本文中にてすでに述べた。その後父親も、とくに入院はしなかったものの、肺を患ったらしい。

(3) NHK の『最後の乗船切符』より。

(4) トメアスーなどブラジル北部については、多くの日伯間移民研究書においてわずかの紙幅しか割かれていない。たとえば『移民史』(今野・藤崎（編）1983) では、200 ページにおよぶブラジルへの移民についての記述のなかで、わずかに 8 ページが北部アマゾン開拓民に割かれるだけである。しかし『移民史』は 8 ページでも北部についての言及があるだけまだいいほうで、三田の『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ』(2009) ではまったく言及がなされていないといってよい（もっとも筆者はこの本を高く評価しているが)。ただ、1990 年代のトメアスー植民地に関しては、北海道大学大学院教育学研究院の教育社会学研究室が、研究報告のなかで一定量のデータと分析を提示してくれている。さらにそれ以前（アマゾン開拓時）の状況については、インタビュー調査をもとに角田が執筆したドキュメンタリー小説『アマゾンの歌』からも、断片的ではあるが、質の高い情報を得ることができる。

(5) ブラジルへの移住初期から第二次世界大戦までに、約 100 万人がブラジルにわたったのに対し（三田 2009：15)、戦後は約 5 万 6,000 人である（海外移住事業団 1973：256-257)。

(6) 多くの研究で強調されるように、たしかに戦前の移民もまた当初は短期の出稼ぎのつもりでブラジルにわたっていた。彼らがこの初心を貫徹できなかったのは、1 つには当初考えていたほどブラジルで集財できなかったこと、もう 1 つには戦争のために帰りたくても帰れなくなったことがあげられる（今野・藤崎（編） 1983：57, 62-79; 三田 2009：121-122)。しかしここで筆者が強調したいのは、もし彼らが当初の予定通りに日本に帰っていたなら、移民研究者たちはそれら帰国者に目を向けなかったであろうということである。たとえば北米においても戦後日本人は強制帰国を半ば強制され、それにしたがった人も数多くいるわけであるが、そうした帰国者の研究はきわめて少ない。

(7) 筆者は過去の論考でクリフォードを引きあいにだし、先住民が近代化を受け入れるにあたっては、「旅すること」ではなく「ホームの境界線を広げる」という小田の視点（小田 2001：311-316）のほうがより適切だと論じたことがある（立川 2009: 第 5 章；TACHIKAWA 2008：46-47)。

参考文献

クリフォード、J.　2002　『ルーツ —— 20 世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝・柴山麻妃・福住廉・有本健・島村奈生子・遠藤水城（訳）月曜社（James Clifford, 1997, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press)。

HIRABAYASHI, L., (KIKUMURA-YANO A. and J. HIRABAYASHI (eds.) 2002 *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan.* Stanford University Press.

海外移住事業団　1973　『海外移住事業団十年史』。

今野　敏彦・藤崎康夫（編）　1983　『移民史 I（南米編)』新泉社。

小内　透（編）　2007　『日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の諸相』(北海道大学『調査と社会理論』研究報告書 24)。

——（編）　2008　『日系ブラジル人のデカセギと国家の対応』(北海道大学『調査と社会理論』研究報告書 26)。

LESSER, J. (ed.) 2003 *Searching for Home Abroad: Japanese Brazilians and Transnationalism.* Duke University Press.

前山　隆　1996　『エスニシティとブラジル日系人 —— 文化人類学的研究』御茶の水書房。

三田　千代子　2009　『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ —— ブラジル移民 100 年にみる人と文化のダイナミズム』不二出版。

中川　文雄・田島久蔵・山脇千賀子（編）　2009　『ラテンアメリカン・ディアスポラ（叢書グローバル・ディアスポラ 6)』明石書店。

小田　亮　2001　「越境から、境界の再領土化へ —— 生活の場での〈顔〉のみえる想像」杉島敬志（編）『人類学的実践の再構築 —— ポストコロニアル転回以後』pp. 297-321, 世界思想社。

新藤　慶・小野寺理佳・濱田国佑　2009　「僻地農村におけるデカセギの影響」小内透（編）『日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住』（北海道大学『調査と社会理論』研究報告書 28）：281-312。

立川　陽仁　2009　『カナダ先住民と近代産業の民族誌 —— 北西海岸におけるサケ漁業と先住民漁師による技術的適応』御茶の水書房。

TACHIKAWA, A.　2008　"Is Commercial Fishing a Traditional Pursuit? Technological Development of the Commercial Salmon Fishery and Adaptation by Kwakwaka'wakw Commercial Fishers." *Japanese Review of Cultural Anthropology* 8: 29-52.

角田　房子　1976　『アマゾンの歌』中公文庫。

TURNER, V.　1969　*The Ritual Process: Structure and Anti-Structure.* Aldine Publishing Company.